過去と現在

美黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
過去と現在

【Ｎコード】
Ｎ０３００Ｐ

【作者名】
美黎

【あらすじ】
あなたには気になる人がいますか？
『好き』っていうことがどういうことかわかりますか？
私にはよくわかりません。
だから一緒に考えて欲しいです。

私には気になる人がいる。（私は中学二年生）

それは・・たぶん『好き』だからだと思う。

気になりはじめたのは小2のころのことである大きなことがあったからだ。

まず、そのキッカケとなったのは、席がえだ。

席替えという言葉で同じクラスだったことは分かっていただけたよね。

席替えは自由に席を選べた。

それが最大のキッカケ。

私はたぶんそのとき好きだった人の隣がよかったんだろう。

だからその人の隣を選んだ。

その席は一列に三人並ぶ変わった場所で

私の好きな人は隅を選んだから、当然隣を希望する私は真ん中を選んだ。

そして私の隣を選んだ人がまさに今、気になる彼である。

幼かった私でも何故自分の隣を選んだのかという疑問は浮かんだ。
そう、空いている席は私の隣だけではなかったのだ。それなのに・・・
なぜ・・・。
おそらくそう思ったのだろう。
今でもその光景が心に残っている。
彼は今でもそれを覚えているのだろうか？
そう思うときもややあった。
怖くて聞けないほどに。
話は変わるがなにせ小学生なものだから
男女仲良し、手をつないで帰るってことも見たことがあったし、
おそらくつないだこともあったかもしれない。
同じ帰り道で同じ方角、同じ町、この条件がそろっているのは同学年でたったの九人。
そのうちに一人しか同じ女の子はいなかった。
その子と違うクラスになれば変える時間帯が多少変わるから男子と帰ったことは多々あった。
しかも小４まで。
我ながらにすごいと思った。

でもそうやって帰ったことがあるのも九人の中のたったの三人だけだ。

他の人は・・たぶん仲はよくなかったと思う、それか覚えてなかっただけかもしれないが。

男女ペアで帰るということをその席替えをやった日にしてしまったのだ。

そう、私の隣を選んでくれた彼と・・。

私は小さいころ単純で思ったことはすぐに口にしてしまうというちょっと厄介な性格なものだからその日も思った疑問を口にしてしまったのだろう。

帰り道にも分かれ道がやってくる。

その分かれ道で私はたぶん聞きたくて仕方がなかったから通学路を破ったことを覚えてる。

そしてついに聞いてしまった。

「なんで・・私の隣を選んだの？」

たぶんそう聞いてしまったと思う。

なんせ小さいときのことだからよく覚えていない。

だが、同じような内容を聞いたのは確か。

このとき彼はどう感じたのだろうか？

どう思って次の言葉を口にしたのだろうか？
今はある意味・・後悔しかのこっていない。
「なんで・・隣を選んだの？」
「それは・・」
彼は戸惑った。
戸惑った彼は思い切って次のことを口にした。
「ーーが好きだから・・」
と、言った。
このとき、たぶん顔はあわせていないと思う。
「え・・・」
もし・・あわせていたらきっと私は・・驚きが混じっていて顔は・・
真っ赤だ。
私はこの後きっと・・
「・・私・・好きな人がいるから・・」
と、彼を傷つけてしまっただろう。
さっきもいったがすぐに口にしてしまうというのが私の一番の欠点

だ。

良くいえば・・正直者、悪く言えば・・言いすぎ、デリカシーのない人・・かな。

その言葉を聞いた彼はどう思ったのだろうか？

あれから六年もたったが覚えているだろうか？

何故か私は忘れられない。

今、それを振り返ると彼には申し訳ないと思っている。

でも、たぶんその頃は好きな人がいるから正しいことをしたと思っていたと思う。

どうしようもない罪悪感をおさえつけていたけれど・・・。

そして、幼かった私は母にそれを話した。

話してしまったこと自体、私はとても大きな後悔をしている。

なぜなら・・母は、・・・人の色恋沙汰に関してからかうのがダイスキだからだ。

何故話してしまったのだろう？

そう思い悩む日々もあった。

でも、一つ心当たりがあった。

そのときはその重大なことの重さに実感が沸かなかったからだと思

う。

それと、今思うのは、・・誰かに聞いてほしいという思いもあったのではないかと思う。

友達にプロフィールをかいてと頼まれたときそれには、ある事柄が質問されていた。

1、好きな人はいるか？

2、告白されたことはあるか？

「・・・・・」

最初見たときふと頭に浮かんだのは

「ーーが好きだから」

という言葉と言ってくれた彼と、そのときあこがれてた人のみである。

でも、すべて私は　Ｎｏ　と答えた。

だっていえるわけがないじゃないっっーー！

それこそ、いろんな人に広められるし、問い詰められるし、

今となっては普通にしゃべっている仲だ。

そんな状態で公になんてできるものかっ、いたら見てみたい。

だからといって嘘をつくのも気がひけた。
だから自分の思いを封じようとした。
でも無理だった。それはどうしようもないことだった。
そしてあるとき、友達が聞いてきた。
「好きな人いるんでしょ？教えて教えて、秘密にしてるからさ」
と。
ほんとに秘密にしてくれるのか、
・・かすかな希望といってしまいたいという思いもあってーー
「ほんとに秘密だよ？それはねーーー」
と、言ってしまう。
「えぇー”ーー！！！！」
友達は叫びすぐさま他の子に教えてしまっていた。
うわ、裏切った！
それだけですめばまだいいほうだ。
だから広まるのを抑えようとして

「冗談だよ。
まさかすぐにバラスとはね、びっくり、あんなのデマカセなのに
あれは嘘だよ。
ーーを試したんだよ、本当に秘密にするのかってネ」
と、強気な口調で言った。
実は本当だったけど。
それに裏切られたことにはすごく傷ついた。
裏切った子と今も同じ部活で接しているけど裏切られることは多々
ある。
だからもう、人にはそんなこと言えなくなっているし、人との距離
も置いている。
そんな私は今では人に意見を言えなくなる始末。
え？そんなことないって？？
そうだね、そんなことないかもネ。
だって人によってまるっきり態度性格が明らかに違うからね。
信頼している人にはたくさんしゃべってるかも。
気になる彼も信頼はもちろんのことで話しているとすごく楽しいし。
信頼できる友人とはたくさん話す、ある程度の秘密も話す、

でも、恋愛関係はいえないでいる。

さて、話を元に戻すがあのことがあった後、私と彼は今まで通りだった。

小学生までは私はとくには彼を意識はしてなかった。

でも、意識し始めたキッカケが中学にはあった。

まず、親が塾に入れというようになったことだ。

親は塾代も安いし近いからという理由でその塾の無料体験学習に入れさせられた。

個別だからといって私も安心して入ったけれど・・思わぬ出会いがそこにはあった。

気になる彼とであったからだ。

「えっ、なんで！？」

たぶん彼は言った。

困惑していたんだと思う。

「〜〜〜〜〜！！」

私も動揺した。

でもそれで気まずくなったわけじゃないし特に変わったわけでもな

かった。

そこは一人の先生が三人くらいの生徒を教える。

教える幅はその生徒によって違う、だから個別そのもの。

教える側も上手かったし文句なかったからその塾に決めた。

時間帯も部活のない日と部活の時間と交わらない時間帯の曜日にしてもらい、

週に二日行くことになった。

そして気になる彼とは・・はじめは二日とも曜日と時間帯が重なった。

私は塾が近いからという名目で自転車通い、彼もまた自転車通いであった。

そして教わる先生も同じときが続くときもあった。

そうすると

終わる時間が重なり自転車で帰るときも、重なると帰り道が同じだからか

一緒に帰るようになった。

帰り始めたとき、話題がないと気まずい空気が流れる。

気まずい空気はいやだった。

彼がどう思ったのかは知らないが

少なくとも私は隣で走ってたくさん話したかった。
だって二人きりだったから。
周囲に知られる可能性は低いし、親にもバレる心配がない。
他愛もないは会話ばかりだったけどその日はとても楽しくて好きだった。
塾へ行っても成績はさほど変わらないけど、
行くのも、授業を受けるときも、帰るときも・・全てが楽しかった。
嫌いな教科はないが
好きではない項目を受けるときでも平気だった。
私の自由を左右する親と、好きではない知り合いどもがわんさかいる学校からのと、
その二つからしばしの間のがれることができていた。
楽しいと感じるのは好きだということなのだろうか？
世の中にはいろいろな『好き』がある。
どういうことが『好き』ってことなのか。
気になる、探す、いると楽しい、もっといたい、たくさん話したい、
これらは『好き』っていうことなのか？

とりあえずそう思うことは嫌いではないはずだ。
嫌いであれば時間が過ぎることが遅く感じる。
好きであれば時間は早く過ぎていくと感じる。
でも理屈だけでは『好き』がどういうことなのかは判断つかない。
話は変えるが、中二になって部活に誘った先輩が悲しくも引退し
いつも帰りは一緒だったのだが、一人で帰ることになってしまった。
まぁ、気が楽といえば気が楽だけど。
行きは卒業するまでの間は一緒に通えるけど帰りは帰れなくなった。
行きだけでも一緒に行くことは楽しかったし安心できた。
他の子も誰かと登校してるのに自分だけっていうのは嫌だから。
そんなときがきてもきっと表にはださないだろうけど。
それはともかくようは、帰りは一人ってこと。
そう、それで一人で帰ったとき、一台の車が過ぎ去った。
そのまま過ぎ去っていくかと思ったけど・・
その車は止まった。

「ーーちゃん？」

自分の名前が聞き覚えある声で呼ばれた気がした。

「・・はい？」

私は聞き返す。

だけど、さっきの一度だけで確信があった。

彼の母親だってことが。

「ーーーですけど、よかったのってく？」

おそらくこう聞かれたであろう。

後ろに乗っていた彼がどう思ったのかは知るよしもなかったが。

「えっ、いいんですか？」

私はつい、聞き返してしまう。

一瞬、断ろうかと思った。

彼ことを抜きにして送ってもらうことにためらいを持った。

けど・・強く断ろうとはしなかったしためらいもたぶんあんまり見えていなかったと思う。

だって断れないじゃん、彼がのっているのに。

彼が困惑していたことは目に見えていた。

私も動揺していたから。

彼の母親は彼のいるほうを見て一度ためらったが
すぐに前に座ってと促してくれた。

彼の母親は覚えているのだろうか、今から六年前のことを。

これは私の予想でしかないが、おそらく彼は当時親に言っていたかもしれない。

私は下に四つ下の弟がいて今は小４だが、何でもかんでもすぐに母へ報告する。

今の私はそんな、何でもかんでも報告なんてできはしないが。

母がどういう性格か分かっていれば話したくても話せないことが山ほどある。

彼が六年前、どういった親子関係でいたかは知らない。

それに当たり前だが私は女子だから男子の行動には理解できないこともある。

弟がいるから姉妹よりは理解してるつもりだが。

同性同士でも思考、行動などが全てがすべて同じではないから思い

切ったことはいえないが。

まぁ、それはともかく、私は彼の車で送ってもらったのだ。

「ーーちゃん、かえるの遅いよね、同じ部活の子もさっきかえってたけど

えーと、だれだっけ？」

「ーーーくん？」

彼の母の問いに私は疑問形で答える。

一つしたの後輩で同じ町の子だ。

だからすぐにおもいあたった。

ここではっきりいっとく。

部長としてはすべて把握していないと後々大変なんで覚えてるだけ。

そして、私は年下には一切恋愛感情は持たない。

誕生日の差で年下ってのは今のには入れないから。

学年が違うとっていう意味。

ほかには・・

「ーーちゃんはどれくらい勉強するの？」

「普段はあんまり、でもテスト期間中には一二時間ぐらいですかね」
たぶん、同じようなこと聞かれて同じようなことを返したと思う。
実際そういったかは緊張して覚えていない。
「へぇー、ーーはそんなにしないよね、メジャーの漫画で埋め尽くされてるね」
「そうそう」
少し実際と違ってると思う。
でも、彼は母親の言葉に頷いたのは確か。
「あ、メジャーみてた。」
私は言った。
本当にそれは見てた。
アニメ好きでドラマとか嵐とかに一切興味がないせいでもあったけど。
「今は漫画になってるよね」
「そうそう」
彼の母は言う。
そして彼もまた頷く。

言葉は実際と少し違っているはずだ。
だが、彼の母の言葉に頷くのは確か。
「そういえば、ーーは、勉強中に寝てるときあるよね」
「そうそう」
彼の母と彼。
「私は漫画とか読んだりゲームとかしてますね・・」
私は言った。
「でもしかられないでしょう？」
彼の母は問う。
「・・しかられますよ。
だからテストの点数低くなるんだって、って」
自嘲気味に笑って答える私。
実際、そのせいでネットは止められた。
会話が終わるとあるのは沈黙。
何か話しかければよかったんだけど・・勇気がなかった。
話したいという思いはあったんだけど・・。

その後私の家に着いた。
そして降ろしてもらった。
「部活頑張ってね」
「はい、ありがとうございました」
そうして降ろしてもらう。
そして見送る。
もっと話しかければよかったと今になって後悔をする。
そう思うこと自体もう、好きになってしまったのかもしれない。
そのあと、それをたぶん祖父に見られた。
「友達に送ってもらった。」
そう、言い訳した。彼の名を伏せながら。
祖父は彼の名を聞いてもなんとも言わないだろうが
母親は何かしらからかってくるだろう。
からかわれたら冷静でいられなくなる。
学校で誰かになんと言われようが冷静に対処するから
リアクションが薄いとか言われるけど、実際そうでもなかったりす

る。

何か私の話題になると決まって
何か言うたびにからかわれるのは目に見えてるし実際はからかわれてる。

だったら何も言わなければ無表情でいれば会話は成立しないからそこで終わる。

だが・・、内心は冷静でいられていない。少しでも気を緩めばすぐに表に出る。

特にさっきのことがあると・・もう我慢できなかった。

自分の気持ちがわかっても相手の気持ちが分からない。

知りたくて仕方がないけどそれと同時にどう思っているのかが怖い。

そんな矛盾点があるからこそ、前に進めない。

でも、そんな矛盾に打ち勝ちたいと思う。

好きがどういうことなのかいまだにわからないけれど、
でも楽しいと思うのは嫌いではないということだということは分かる。

言葉って人に影響を与えるからって
信じすぎも疑いすぎもいけないと思う。

でも、今、ここに書いてあるのは嘘偽りはない。

本心ってすぐに言葉に出せないときがある。
大人に近づくにつれて言いたいことがどんどん言えなくなる。
だから親にも友人にも隠してることがある。
特に好かない連中にはもっといえないことがある。
先のことを思って前に踏み出せない状況に私はいる。
でも！
キッカケがあればおそらく本心だっていえるはず。
キッカケさえあればなんとでもなる。
だから・・
まず彼に今の気持ちを知ってもらうキッカケが
まず彼とたくさん話すキッカケが
あることを、つくれることを願いたい。
まずは・・同じクラスになれること・・かな？
その先は・・同じ高校・・かな？
それと・・彼のことと・・彼の気持ちを知るキッカケが欲しい。

（後書き）

実話を元にしています。
誤字脱字があったら報告してください。

・・好きってどういうことなのか考えてもらえましたか？
あなたに好きな人、気になる人はいる？
ってきかれたら・・だれか思い浮かぶ人はいますか？
もしいるのなら・・後悔のないような選択をしてくださいね。

すきにはいろいろあるよね？
くわずぎらい、とか、あることが原因で、とか
味見がもとできらいに・・とか（たとえが食べ物だけど、わかるよね？）
もともと、・・原因があってのことで嫌いにってよくあるよね？

すき・・自分の思う好きはどんなのだろう？
きらいではないのは確かなんだけど・・
なっとくできなかったり
ひとをすきになるってことがわからなかったり
とてもなやむこともある。
はなしをしていて、自分の気持ちに確信がもてるよね？

好きにりゆうなんていらないのかもネ、心の中で勝手に
きゅんってしめつけられるし、
うきうきわくわくどきどきするし
きっと自分のことは自分が一番分からないのかも。

さぁ、あとがきを読み返してみて、私の秘密分かるかも。
読み方は横だけじゃないよ？
またこの続きを短編で出すかもね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0300p/

過去と現在

2010年11月24日16時26分発行